

【392】

氏名	菱谷政種 ひし たに まさ たね
学位の種類	農学博士
学位記番号	論農博第662号
学位授与の日付	昭和51年9月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	製糸業における経営構造の特殊性に関する研究

論文調査委員 (主査) 教授 貝原基介 教授 上村恵一 教授 菊地泰次

論文内容の要旨

製糸業は、原料の繭、製品の生糸のもつ技術的経済的性質によって、原料の購入、生産（加工）行程、製品の販売等各分野にわたってそれぞれ特殊な経営構造を形成させる要因をもっている。

先ず繭は、蚕という昆虫の吐出した粘液の凝結した1本の糸でできたもので、繭のほぐれ具合（解舒）と、一定重量の繭より繰りとり得る生糸の量（糸歩）によってその品質がきまるのである。繭は蚕の変態の一時期に作られるもので、乾燥して中の蛹を殺したとしても、なお湿気により腐敗や汚染変質をおこし易く、乾繭の輸送は繭中の蛹の衝撃により糸を傷つけ品質を損うことになる。かくして繭は重量減損原料であり製糸業経営は養蚕立地に吸引され、地域養蚕の盛衰によって重大な影響を受けることになる。

次に繭の価格は、協約的に一定方式によってきめられ、繭出廻り時の糸価を基準とし、この糸価は生糸の先物価格を反映する仕組となっている。それにも拘らず、実際には繭の価格算定に用いた糸価と、製糸業経営が販売する糸価の平均が一致していない。製糸業経営にとって原料繭は生糸原価の約80%を占めているから、製糸業者は原料繭の獲得において経営上の危険を負担することになる。

しかしながら、第二次世界大戦後とくに昭和30年以後においては、糸価が一般的に上昇傾向をもち、製糸業者の平均販売糸価は繭出廻り時の糸価よりも高く、長期的にみて商業的利潤が発生していた。このため危険負担よりも寧ろ一般的に製糸業者の利益が保証されていたこととなり、業種、規模、立地ならびに免許制度による製糸設備の規制等を条件としながらも、それぞれの経営成立を可能にし、いわば多数が群立する状態で競争的に活動したのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、第二次世界大戦後とくに昭和30年以後のわが国製糸業の経営構造を究明したものである。戦前は、14中生糸を生産し輸出する寡占的業務とみなされていたが、戦後においては、経済の変革・高度成長の下で機械、設備の新設・更新に対する免許制度などの保護と規制を受けながら国内需要に応ずる大糸

生産業務に転換している。

著者は、製糸業の構成について統計資料を整理して、業種別、規模別、地域別、組織形態別、操業時間別等の単独ならびに結合的観点から克明に検討して、異質的な内容をもった経営が数多く競争的に存立していることを明らかにし、このような状態を成立させている製糸業経営の特殊性を解明している。いま本論文の評価されるべき点を挙げると次のとおりである。

(1) 製糸業経営について技術的・経営的に考察し、さらにその立地配置について実証的に解明し、製糸業経営は養蚕地域に位置することを指摘している。

(2) 製糸業における経営収益性について調査資料を分析し、経営間における収益性の違いは、生糸価格の変動に大きく影響されることを明らかにした。

(3) 製糸業における生産原価の大きな部分を占める原料繭の購入価格は、製糸業者と繭購入区域の養蚕農業協同組合連合会との団体協約的取引によって定められているが、その算定が繭出廻り時の糸価を基準とし、それに配分比率を乗じて算出する方式をとるため、地域によっては繭出廻りに違いがあり、各製糸業経営の購入する価格にも違いがあることを見出している。

(4) さらに糸価が上昇する傾向にあれば、原料繭購入者に有利となり、製糸業経営は継続的に原料繭を入手するため、原料繭の購入価格に競争的に買増金を上積みしている事実を明らかにした。

(5) 原料繭の協定価格算定方式が、実現した過去の糸価を採用するため、製糸業経営は購入した原料繭の価格と、販売する生産物価格との関係から長期的に経常的利潤を得ていた事実を示し、とくに経済繁栄期にそれが大きいことを実証している。

以上のように本論文は、戦後とくに昭和30年以後における製糸業経営構造の特殊性を解明したもので、農業関連産業の研究に新知見を加え、農業経済学ならびに農業経営学の発展に貢献するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。